

鈴木商店掲載記事

▽：このほど九十億円の巨費を投じて神奈川県川崎市に食品の新工場を完成させた日本油脂の中嶋洋平社長。「日本で、たぶん最も生産性の高い工場」というほどの自信作だ。危害分析重要管理点(HACCP)に完全準拠した最新工場で、マーガリン工場の要ともいえる練り工程には最新の機器を導入。また食品研究所と製菓・製パン試作室であるベーキングラボも併設している。

▽：日本の加工油脂マーケットは現在、縮小傾向にあるものの、技術力で付加価値の高い製品を送り続ける同社のシェアは増勢基調にある。「食品事業は当社の前身である鈴木商店が大正六年(一九一七年)に創業して以来の基幹事業。そして、これからも基幹であり続ける」。新工場建設は、食品事業を「基幹中の基幹事業」と位置付けた宣言でもある。

(化学工業日報 平成16年7月14日)より転載



景気の回復を反映して、企業の倒産が減っている。結構なことだ。中小企業の倒産では、債務を連帯保証している経営者などが、裸になっても返せないほどの借金を背負い込む場合がある。再起できるようなシステムが早急に欲しい。

▼しかし市場経済である以上、「倒産」自体は無くならない。残念ながら必要悪とも言える。森林について「更新」と言えば、若木が古木と置き換わることを意味する。鬱蒼とした森では、種が落ちて芽生えても日光が不足して枯れてしまう。寿命の尽きた大木が倒れて初めて、日が差し芽が育つチャンスが生まれる。

▼倒木は土に返り、次の世代の栄養分になる。絶えず繰り返される更新によって、天然の森は成り立っている。経済も似ている。倒産しても、すべて無に帰すわけではない。歴史を振り返れば、戦前の鈴木商店の例がわかりやすい。第一次世界大戦のブームに乗じて急成長し、戦後の反動で破たんして消滅した。

▼だがその流れをくむ企業が今もいくつもある。神戸製鋼所、帝人、石川島播磨重工業、双日ホールディングスなどがそれだ。鈴木商店の大番頭金子直吉が全盛期に作った俳句に「初夢や太閤秀吉奈翁」というのがある。氣宇壮大なのか誇大妄想なのか。夢破れ七十七歳で寂しく亡くなったが、遺したものは大きい。

(日本経済新聞 平成16年10月16日)より転載

講演

金子直吉翁を語る

森 本 準

ただいまご紹介を蒙りました日本エヤーブレイキの会長森本でございます。小野総務委員長から私の体験を話せというお言葉であります。が、小さい私の体験を話すよりもっと偉い人の話をした方が面白からうと思っておりますので、私の尊敬しておりました鈴木商店の大番頭さんの金子直吉翁のことについて、ひとつ漫談的にお話をいたしたいと思います。昨年の春、兵庫新聞社で松方・金子物語という本を出されております。その本は神戸の実業界が生んだ偉い二人の生涯のこと、その外について非常に面白く書いている。私は鈴木商店に入りましたのが大正十二年の関東大震災当日であります。鈴木商店が破綻した昭和二年までお世話になって、その後神戸製鋼所に移りまして、昭和三年から昭和十九年に金子さんが七十九歳で亡くなるまで、しばしばお目にかかってお話を伺ったのであります。それで「松方・金子物語」に書いてないことも加えて皆さんのお耳に入れたいと思います。

一、金子直吉翁のユーモア

金子さんは人物も識見も非常にすぐれた方でありまして、いろんなことをなされておりました。一面にまた非常に話上手でユーモアに富

んだ方でありました。ユーモアに富んだお話を一つ二つしますと、金子さんは非常に大食をされる方で、宴会とか、あるいは一緒に飯を食べにまいりまして、果物でも何でも、出してあれば人のものでもムシャムシャ食べておられる。大変健啖家ですねといいましたら、神戸には昔、大食会というのがあった。ある日スズキ(鱸)を出されたが、僕は大きなスズキを三尾食べたので、皆が驚いた。ところがその時一人口の悪い人がおつて「金子がスズキを三尾や四尾平らげるのは何でもない」ということをえん曲にいったことでもあります。それからこれは皆さんにも応用のできる話と思いますが、あるお正月に金子さんのお伴をして室屋に行きました。そこに年増の芸者がおりまして「金子さん、お約束のものはもう出来ましたか」と、こういう。金子さんは「うん、忘れちゃおらん。まあ帯だけというわけにはいかんから、羽織もと思つて蚕を飼うちよる。それも近いうちにとれると思うが、帯も羽織もということになると、ついでに箆筒も揃えてと思ひ、桐の木を植えておいた。ところが残念ながら虫が食いよつた。それでまた桐の木を植え変えておるから、それが役に立つまでもう暫く待つてくれ。」こういうことでもあります。芸者の方では「羽織もありません。箆筒にも及びません。帯だけでいいから早くして下さい。」いや、長年お世話になったんだから帯だけで済ませるわけにはいかん。ついでに羽織も箆筒もそろえてやるから待つてくれ。桐が大きくなるまで待つてくれ。」ということでした。私はその当意即妙の応酬に感心した次第であります。

そういうようなユーモアに富んだお話も多かったです。